舟峠をすぎ分杭峠へからむ辺から、 の説に、彼を先導に出かけたのだが、 杭峠へ出れば眺めもよい、という交野 尾根通し舟峠にのぼり、横に絡んで分

て少し失望したが、宇津木部落をへて

五越月

-湯沢-大子-八溝山-黒磯 八 御坂—三峠—清八峠—笹子 六一米(川喜田、佐、近、村、望)

袋田—月居峠—男体山—大円地

久一朗、川崎精雄、近、村、望) 小明、川崎精雄、近、村、望) 八月 万場―瀬林―叶山―万場―屋

- 股峠-坂本 一五九八米(佐藤万場-瀬林-叶山-万場-屋久

(近藤恒雄、村、望)

跡が怪しくなり、

結局妙な窪地のヤブ

定価一部 50 円 第 279 号 昭和 43 年 9 月 10 日発行(毎月 10 日発行)

### 会員の登山 山白書◇

敏

とになり、あとの五人は市野瀬の橋本里心のついた川喜田、松本は帰えるこ 員。額をあつめて協議のあげく、急に 尾金二、川喜田壮太郎、望月達夫、松ンである。同行の面々、深田久弥、村 なんとか分杭峠を鹿塩へ越す予定を遂 屋に、年の暮からトグロをまいていた 本義夫、三辺夏雄といずれもJAC会 登って、展望をたのしむ予定もオジャ どころか、いよいよ降りしきる。これ 和四十二年の元旦は、夜来の雨がやむ 会員交野武一のところへ押しかけて、 しようということになった。 一日、分杭峠は車道が通じたときい 山室鉱泉で迎えた昭 て悪るい成績ではなかった。

小屋—大峠—流石—三斗小屋—黒 那須茶臼岳—三本槍—大峠 遠刈田—熊野岳—刈田岳 六三二米(望) 五九七米 一杉ノ

天候も崩れて小雪に風さえ加わり、 に総退却となった。交野先達の信用ガ との七、八年来正月はスキー地など 落ちはいうまでもない。

佐

先きが案じられたものの、結果は決し 年はチョット出鼻をくじかれた形で、 たのしい想いをしてきたのだが、この らは助かると、静かな山や峠を歩いて 人が押寄せて混めばこむほど、こち 遂 六月 村松 六月 松川 月 燕—黒沢池—火打—焼山往復 五米(近、 |東三条 (村井米、 一姥倉—岩手山 --日本平山--村松-栗ケ岳 二三五〇米(笠原藤七、 Ш 小方、 一網張 -藤七一三ッ石ー

十月 若松—海老山峠—漆峠—喰丸峠 九月 神河内—奥又白池往復 二三三五米(近、 二八七〇米(網倉志朗、 〇米(村、其他大勢) -転石峠-針生-七ケ岳-三滝温泉 川崎、望 錦織保清 室次雄、 8

村尾、交野、望月、三辺)

舟峠 登高八〇〇米(同行深田

月 市川大門―四尾連湖―蛾ケ岳― 三方分山—女坂—精進 一

五六九米

十二月卅一日 豊橋―平岡―上 向大谷—尾ノ内—二子山—叶後 一十二月 三峰口—白井差—両神山—日 -月 小出—五味沢—浅草岳—只見— 九〇八米(深、近、村) 下十枚山—月夜野段 一 村、伊倉剛三、佐藤金一) 六十里越——大白川 小滝清次郎) 、松、黒柳満義、村尾統一) 、松、黒柳満義、村尾統一) (深、村、岩永安雄) 梅ヶ島―関ノ沢―上十枚山― 一〇八五米(近 五八八米 ると、まあ後廻しということになる。

昭和43年(1968年) 号 (No. 279) 本山岳会

> 次

(J. A. C.)

随筆・紀行 一会員の登山白書……藤島敏男… 1 去年の旅信と山信一束 

ジョン・ティンダル ……八十島信之助… 6 制動確保について……石岡繁男… 3

ヒマラヤ登山について……… 4 ソ連登山隊の夏山現況…田村俊介… 5

アフガンより…………高木泰夫… 8 名大アフリカ調査隊……矢入憲二… 8 図書室だより 寄贈依頼図書の受入………… 8 磯野記念文庫…… 7

既刊図書の寄贈・・・・・ 7

新入会員…………10

くものを好まない。

民衆、群衆、

たかと、後指をさされることもあるま らば、あいつもとうとうヤキがまわっ 大差ない。回数十六回、 いとおもう。 日という数字が出た。まずこの程度な 足であるいて登ったメートルだが、 月以来登高米累計 延日数四十六 七〇〇米余と 四 三五

始末をつけた。爾来K君と一緒の山あ それも面倒なりと、加えて2で割って 四米あちらが三〇六七米である。相会 五ケ所だけ、あとは多かったり少なか 登りの内、両人の数字が合致したのは 私の計算を同行した発案者近藤君に照 都度計算することにしたのはいいが、 これは一年の終りに勘定すると、とん して地図をにらんで調整すればいいが 合を求めたところ、ナント十七ケ所の 前記六月の八幡平・岩手山行のあと、 でもない手間ヒマがかかるので、その たりマチマチ、結局こちらが三〇二

暗かったり、アルコールが廻ったりす を確認するようにしているが、電灯が るきでは、夜の宿でその日のメートル

会費をお納め下さい

未納の方は至急会費を納入して下 未納の方へはお送りしておりません。 東京、神奈川、千葉、埼玉の会員は 岳六十二年は昭和四十二年度会費 3

海外遠征の成果とかにも触れるべきだ あるきのたのしさ、ナントカ大会だの 時だけで、ほかは全部、仲間だけの山 でしたのはこの ろうが、これは私個人の白書だから、 たのである。 仲間の川喜田君がいつもかつ いでく 句はいえない。 像するだけでゾッとしてきた。 てくる人種が、大拳してきたのかと思比谷公園か皇居前広場に、ゾロゾロ出 るべく接触しないように心がけてい 関係のないことには言及しないでもよ 昭和四十二年の逝く足音を静かにきい たのしさを満喫したのだから、余り文 た。夏のさかりはどんなだろうと、 か来るものかと、心にきめたことだっ うような人出で、私はもう神河内なん が、前記の九月神河内―奥又白のとき 仲間はめったにそんなへマはやらない いて衆に押しまくられる。われわれのよほどうまく立廻らないと、山中にお 登山の気風が作興されすぎて、近頃は ら、山へいったときは猶さらであるが、 嫌いだから、日常もそういうものにな 講習会だの、研究会だのでは味えない る。街の中でさえ忌避しているのだか そして大晦日は遠山川上流下栗で、 本場の伊勢エビに美酒をくんで、 まだあるだろうがみんな 想

一千円。その他の地方会員は千六百

つもいうことだが私は衆の字の

### 去年の旅信と山信一 束

#### 日 高信 六 郎

思い出ふかい丘があり、はじめての処 るのだから罪はない。 もあって、当人はけっこう楽しんでい 山振りが見すぼらしくなるのは気恥か にした。年をとるにつれてだんだん登 たので、敢えて旅の行状記を綴ること いが、毎年たよりを寄せるくせがつい 山あるきを書くのは時期おくれも甚し いが、その中には永年目ざした山や ことしも半ばをすぎた今ごろ昨年の

た正銘の薩摩料理は珍らしくおいしか さんのお世話になった。お宅でよばれ 壊に驚きあきれた。今度も会員赤星昌 者の飽くない商魂と遠慮ない自然の破 訪ねて、この地方で名の通った観光業 を正面に仰いで久濶を舒し、長崎鼻を から開聞神社にまわり、端正な開聞岳 月はじめ鹿児島に行ったとき、池田湖 昨年暮れの相模大山いらい蟄居。三

ことになっているので、久しい前から

ご神体となり、かれは玉木(後に玉置) 玉がかかっていた。それが玉置神社の

ている。ミレーの旧居を誘うひまはな を散歩した。この辺にも巨岩が聳え立 では乗換え時間を利用しフォンテンプ 湖畔からモンブランを望んだり、パリ からマッキンレーを眺めたり、レマン つところがあって岩登りの場を提供し に出かけた。忙しい旅だったが、機上 ーの森に近いバルビゾンで中食し森 四月下旬に往復一週間でジュネーブ

翌日から二日がかりで小雲取、大雲取

よすがもなかった。川湯温泉に泊った え、そこに玉置の本家が住んでいたと こは江戸時代までは参宮路に当って栄

いうが、ふるい人は散りはてて尋ねる

の連峯をつたって、いわゆる中辺路を

のうちに二名山をかけることが出来 転法輪寺の住職を一人で兼ねる葛城青 木神社の社務所に泊り、神社の宮司と 剛山の肩で下りたときは雨だった。葛 た。夕方千早からのロープウェイを金 にもロープウェイが出来たお蔭で一日 金剛(一一二五m)に登った。葛城山 に導かれて、先ず葛城(九五九m)と 五月の連休には会員仲西政一郎さん

> ちにこだました。大むかしこの山上に から大峯山脈南端の玉置山(一〇七七 車を下りたのは夕方に近かった。それ そがれているのは物足りない。平谷で 毎夜光るものがあって村人が恐れてい かり日がくれて仏法僧の声が深い木立 m)に登った。社務所につく頃はすっ んのダムにせき止められ流動する勢を なみを縫って蛇行するこの川もたくさ バスに乗って十津川沿いに下った。山 えんえんと続く。東麓に下り五条から 望すれば雲海の上に曾遊の大峯連山が れ桜は満開だった。翌朝湧出岳から東 氏のお世話になった。お寺の前のしだ た。ある人が登って見ると巨木の枝に あった。

けに夜は会員奥科五郎さんたち長岡ハ ぞれに風格をそなえていることを実証 が、なかなか立派な山だ。名山はそれ した。この山も私にははじめてである して一緒にお宮に詣りケーブルで上下 の車に乗せてもらって弥彦山(五八六 下旬には佐渡の会合に出た帰りに新潟 朗唱が聞けなかったのは淋しかった。 尾崎喜八さんが不参加のため新作詩の ん等もご一緒で賑かだったが、病後の け、徳本峠を越えた。槇さん、佐藤さ るなど会員諸氏のお世話になり通しの 千谷に行き、うまいそばをご馳走にな イキングクラブの皆さんに誘われて小 したのである。高頭さんの寿碑に対面 で弥彦山岳会の元気な諸君と会食欲談 m)を訪ねた。会員花井馨さんのお宅 で藤島玄さんに迎えられ、会員立川氏 したのもうれしいことであった。おま 日であった。 六月は恒例のウェストン祭に出か

その奥の伏拝という部落を訪ねた。こ る。翌日山を南に下り、十津川を遡っ 桧の巨木が多い。頂上は草地だが南方 代杉は周二〇mに近く、その他にも杉 詣って見たいと思っていた。社後の神<br/>
。 えがある。それがわが家の始祖という 姓を名乗って神に司えたという云い伝

て本宮に出て熊野神社に詣り、さらに 大雲取越えのあたりが見はるかされ

九重西麓筋湯付近大岳の地熱発電所を 阿蘇からやまなみハイウェイを通って ころだが、それから五十六年、 った。この辺は中学生のとき歩いたと 視察し、千町無田を過ぎ山下池畔に泊 七月初旬には福岡から熊本にまわり 雨と霧

危ぶまれるのは考えものだ。夕方那智

につき翌日新宮の速玉神社に詣って能

ないばかりか、那智の滝の水源さえも しく進んで熊野路のイメージにそぐわ が空しく立っている。途中伐採がはげ 石だたみは処々に断続して雑草が生 参宮路も今はすっかり荒れはてて古 辿った。むかし熊野詣で賑わったこの

かぶさり、廃屋のそばには墓石と石仏

た。始終笑声を絶やさぬ楽しい二日で 峠から登って西原峠に下り数馬に戻っ じておりながら今度がはじめて。鞘口 た。この山も数馬の山崎屋も久しく念 加わって三頭山(一五二七m)に登っ 日には山岳会東京支部解散記念山行に ねたとき位のものであった。帰った翌 のは山中温泉の奥に古九谷の窯趾を訪 と古墳を訪ねた。多少山に緑があった 投げ網による捕獲法を見たり、那谷寺 に南下し、深田久弥さんの故郷大聖寺 まわった。安宅関趾から舟で海岸ぞい に寄り、程近い片野の鴨池で珍らしい 五月中旬石川県の南部を二日間かけ

歩道を黒四ダムまで歩いた。発電所長 なったのは不本意だった。みちは岩を が同行されたのでいささか大名行列に がかりがつけられて歩きよく、 穿って幅広くなり、すっかり針金の手 ムから小雨をついて黒部川沿いの日電

のために上高地から徳沢に入った。講 のように浮んだ。月末は信濃登山学校

深志高校生たちがその翌日西穂の頂で 山を下りる日小梨平で道づれになった その念願がやっと叶ったわけである。 見わたした。雨男の私には珍らしいこ 年は高山植物を採る人が少くなって、 蝶ケ缶ヒュッテ主人の話によると、近 副校長にお願いして、大滝山(二六一 習は涸沢でやるのだが、万事小島六郎 雷撃に仆れた報を知って驚き悲しん の「雲表」いらい心にかかっていた、 とであった。この二つの山も鳥水先生 晴、槍穂高連峰をはじめ四方の山々を 草木はふえる傾向だと云う。翌晓は快 景色に趣があって、なかなかよかった。 (一八三七年)に開かれた「飛驒新道」 た。徳沢からの大滝みちは天保年間 四m)と蝶ヶ岳(二六六四m)に登っ であるだけに、道のつけ方やまわりの

日一行と別れて字奈月に泊り、仙人ダ かれて歩くうち別山乗越に出てしま 改善が施されることになった。霧にま とする富山県自然保護協会が努力さ た。この是正のために牧師さんを会長 観の破壊ぶりは、霧でよく見えなかっ された山頂のいわゆる社務所の自然景 をついて雄山まで行こうと登り出した れ、審議会でも問題になって、多少の のは七十を過ぎた児玉政介老と筆者の して一の越まで上った。中食後雨と霧 の立山貫通トンネル工事の現場を視察 に加わって立山に登り、黒部観光会社 二人だけ。反対論者の虚をついて急造 九月初旬には自然公園審議会の一行 雷鳥沢に下りた頃日がくれた。 됗

#### 山 岳 広告のお願

ざいます方は事務局までお知らせ 上げる次第です。お心あたりのご の御紹介をいただきたくお願い申 でもあります。皆様により広告先 掲載しておりますが、この広告は す。御高承の如く、巻末に広告を 下さい。(8月10日~10月20日) 刊行を目標に編集をすすめていま >広告料金(印刷黒一色) 山岳」出版のための大きな財源 「山岳」第六十三号は本年十二月

裹表紙見返1頁 英文見返1頁 付見返1頁 普通1頁(燕12.5×溪18.0篇) 1/2頁 1.項(梅12.5×維 9.0篇) (横12.5×縦 6.0種) ¥ ¥二五、 ¥ 五、 ¥二五、 八,000 000 000

六一三m)についた。帰りは十和田湖 から三十分たらずで八幡平の頂上 から秋田県境まで開通した車道の終点 岩手山が晴れた秋空を限る。松尾鉱山 が目的だった。松川温泉までは左手に つづいて松川と八幡平の地熱発電視察 で盛岡から八幡平に出かけた。昨秋に つかしく眺めた。月末には同じ顔ぶれ んの登山用具が陳列されているのをな 館を訪ねて思い掛けず故加賀正太郎さ ンネルをぬけた。翌日大町の山岳博物 業したばかりの小屋で小憩し、車でト 暮れてダム直下についた。その日に開 歩いたところ、今昔の感が深い。日が 蔵谷から上流は八年まえ会員古沢君と めての黒部峡谷は私を楽しませた。内 ときとは大へんな違いであるが、はじ 木暮、中村、冠さんたちが遡行された

「山岳」編集委員会

#### 制 動確保につい 7 1

石 畄 繁 雄

## 制動確保について

落下エネルギーと摩擦熱のエネルギ

垂直に墜落し(垂直落下距離をHメー ルギーとよぶことにする。 きさは、エネルギーの形つまり E1= という状況にあっては、山の障害の大 力をアキログラムとする)が作用する トルとする)、その後ザイルに張力(張 下単にWキログラムとする)が空中を W×Hで示される。Eを落下のエネ トップ(体重をWキログラム重、

保存の法則により、落下のエネルギー 間で摩擦熱を発生させ、落下のエネル の間で、あるいはザイルと確保者との る場合には、ザイルとそのカラビナと 確保者との間にカラビナがかかってい か弾性確保とよばれる)と、トップと 屈曲等で吸収させる方法(静的確保と をザイルの伸びとか確保者の膝、腰の の登山者の技術としては、エネルギー ギーを熱エネルギーにかえてやる方法 そのような山の障害を克服するため る。

前者の方法は、落下のエネルギーを

を確保するための唯一の方法となって るものであり、現在ではトップの墜落 の方法ではザイルが切れるとか、そう 吸収するに充分でないので(従ってそ いる。へこのほかに私が考案した方法 発生して、ハーケンがぬけるなどの不 でない場合でもザイルに大きな張力が (特許二四六七七六号)などあるが現在 都合が発生する)後者の方法を使うと この方法が制動確保の技術とよばれ

> なったときトップの墜落はやむことに 熱エネルギーをEとすれば、E、=E2と 実用化されていない) さていま、 このようにして発生した

はならないと思う。 少くとも大凡の見当がついていなくて 行なうには、この計算が必要である。 ばよいかを述べる。制動確保を正しく き発生する熱量はどのように計算すれ るにはどうすればよいか、またそのと 次に、そのような摩擦熱を発生させ

ザイルの張力をアキログラムとすれ アキログラムとし、かつ右手首の先の 保者の右手首(制動手という)の間で ラム(アを以下墜落者のザイル張力と 確係者、Cはカラビナである。トップ い大きく、アでは通常のとなってい ば、ザイルの張力は、トップに近ほど の間でてきログラム、確保者の腰と確 よぶことにする)、カラビナと確保者 を、トップとカラビナの間でアキログ イルには張力が作用する。その張力 第1図の想定例でAはトップ、Bは

熱はカラビナにも確保者にも発生しな イルを動かさなかったとすれば、摩擦 がザイルをしっかり握ったままで、ザ さてトップが墜落したとき、確保者 (ザイルが伸びるのでカラビナには

> 確係者がザイルを手から離してしまっ んど生じない。 たとすれば、この場合も摩擦熱はほと 摩擦熱が少し発生する)。これに反し、

手の三箇所で発生する。 熱はカラビナ、確係者の腰および制動 を加えつつザイルを滑らせた時、 結局、確保者が制動手に適当な握力 摩擦

ことによって、ザイルにほぼ同じ大き ルギーは、力とその力で動いた距離の たとする。そのとき発生する摩擦熱 トル送り出したとき、墜落者が停止し さの制動力を加えつつザイルをレメー Ta)となる。従って合計の摩擦熱Eは 積で表わされる)確保者の腰の部分で は、カラビナでは  $L(T_f-T_b)$  (エネ 送り出しザイルの長さしの計算  $E_2 = l(T_f - T_b) + l(T_b - T_g) +$ いま確係者が制動手に握力を加える  $l(T_b-T_o)$  制動手では、 $l(T_o-$ 

トの電球を一分間灯したときの熱量に したときのエネルギーは、一〇〇ワッ グラムの体重の人が一〇メートル落下 になるかといえば、たとえば六〇キロ となる。へこれはどのくらいの熱量  $l(T_{g}-T_{0})=l\times T_{f}$ 

るので W(H+l) であり、また  $E_1=E_2$  であ 一方、落下のエネルギーEは、Ei=  $W(H+l)=l\times T_{f}$ 

めるおそれもほとんどない。 イルが切れることも墜落者の内臓を痛 るとすれば、この程度の張力では、ザ となる。いまの丁の大きさは(体重の 一倍約二〇〇キログラム) が適当であ  $W(H+l)=l\times 3 W$ 

となり l=H/2

は、ザイルを滑らさないで止めてしま 生させる目的で送り出すザイルの長さ ことになる。このことは墜落時の状況 た時の落下距離の半分が適当という となる。つまり確保者が摩擦熱を発

もあてはまる。

平方向の運動エネルギーとなって ネルギーは、落下とともに水平方向の る。 は、落下のエネルギーはことごとく水 ブが振子の支点の直下にきたときに 運動エネルギーに変わってゆき、トッ ルには張力が作用しはじめかつ落下エ 墜落した場合には、墜落と同時にザイ ただしトップが水平トラバース中に

長さだけ空中を垂直に墜落して岩盤に そのときの衝撃の大きさは、ザイルの ので問題はない。へしかしもしもトッ イルの張力では体重の三倍を越さない 衝突したときの衝撃に等しい。 に立っている岩に衝突したとすれば、 ブが、振子の支点の直下の位置で垂直 従って 1=0 となるが、この場合ザ

30

落下速度 落下距離

(メートル/秒

(メートル)

かくするなどの配慮が必要となる。ま ロンザイルの場合は、まず切断する) ひっかかるようなことはないか(ナイ 距離(H+1)で激突するような岩盤の も墜落が起きたとき、その合計の落下 ップする可能性のある場所では、もし らない。またトップは、かりにもスリ のザイルを手元に残していなくてはな でぬけないだけの確信をもたなくては が体重の三倍、アが体重に等しく従っ 力は、後から述べるように第1図でで ップから至近支点のハーケンにかかる た丁を体重の三倍にした場合には、ト あればハーケンを打って墜落距離を短 などを出来るだけ確かめ、その危険が て体重の四倍となるので、トップは、 有無とか、墜落中ザイルが鋭い岩角に ーケンを打つときハーケンがその力

関係を示すものである。たとえば初め の落下距離Hを二〇メートルとす 第2図のグラフはH・Lおよび丁

とは無関係である。たとえば第4図な いし第8図の想定例のいずれの場合に

第2図

制動確保をしたときの落下速度

落下時間

P

落下距離

落下速度

従って確保者は、少くともその長さ ちょうど二〇メートル落下するのに要 = Wであれば落下速度は刻々小さく ザイルには張力Tが発生するが、制動 二〇メートル/秒となる(落下距離は ば、それまでの落下時間は落体の法則 Hと1との関係は、墜落時の状況には R<sub>2</sub>PQ の面積すなわちlは一〇メー =3W であれば落下距離は、三角形 つまりしはHに等しくなる。また了 st 10PQ=1R,PQ であるので、 確保により T<sub>/</sub>=2W であったとすれ 三角形 OPQ の面積でも示される)。 から約二・○秒そのときの落下速度は トルとなる。へこのグラフによっても 落下距離は合計四○メートルとなる。 した時間に相当する QRi で停止し、 無関係であることがわかる。 二〇メートル落下したとき墜落者の 落下速度は以後一定となり、 T/

#### 常 さ h 小 伝

IX

#### 初 見 雄

たという。 そうで、時たま顔を会わせる時があっ 神経痛の湯治で、長逗留の自炊だった 像できることである。 事情や知識を得たであろう、ことは想 をたずねたであろう。番頭さんからも の女史は宿の斎藤さんに上高地のこと を決めかねていたとすると、この高山 さる一月会った中尾の衆の一人は、 酣の白骨温泉で、落ちゆくさき

まりだったそうだ。 なし、そして次が神様のことになるき 話は飛驒の事、畑作の事、身の上ば

すんなり沁みこんでゆくらしい。 観しなかったと断言していたが、信心 ず、受ける気もなかったから実物は拝 もなかったが、農村の純朴な病人には の方は大いに気をひかれたらしい。 彼女の作品購入の件は、依頼もされ 素姓不明では神様の戸籍は糺しよう

えたいのだが、間違いであろうか? シャーマニズムも一種の芸であると考 みてもラチのあくことではないから、 う。一体どちらが本職なのだと疑って だら、離さすまじの必要な武器であろ 新しい宗旨でも旧い宗教でも引きこん きない、しかし病気を治す触れ込みは 神様が不明では、内容の、説明はで

> ちこに証明されつつある。 長であろうし、いやしくも霊験はいや 片方の腕は芸術の使命もだしがたしと 奮いたってくるのも、当然な心理の成 と、満たされぬ思いもつのるだろう。 もあるべしと考えただけなのである。 が女性であることの例から推して、さ きっかけにしてもいいし、教祖の多く を興す気であれば、ここいらあたりを しい。至極結構なことで、新しい宗教 飛驒のお百姓さん相手では役不足 多少のインチキ性は、ない方がおか

上高地の方角を睨んで地団駄をふんで ければならぬテキはかなたにありと、 いたと思われるフシも頷けてくるので 術を施して、次に「不惯」をかけな

しばかりプレーキをかけてくるのであ 見もあって、これが常さんの独走に少 には及ぶまいと、なかばやっかみの意 にも若い美人をおさしつかわしになる う、不公平は我慢もしよう、しかしな れてくるのは明らかに不公平であろ 常識型人生にあらかたな顕現がなく はないから、上高地へ馳けつけるのに 破滅型の方に意外にも援助の手が現わ それに手綱の引きしめてがいるわけ

めずして五十年の歴史がかけるであろ はいか様に展開していったのか、究明 常さんとの出会い、話合いの進み具合 したいことは多いのである。これを究 さて、上高地に乗込んできてからの

の取入口で水番をやっていた、田川さ小屋へ転りこんできたものか、大正池 んあたりのとりもちか、いづれこのう から術をかけたか、それともいきなり 伝心、忽ち火花が散ったか、女史の方 人の必要もあるはずはないから、以心 ちの一つであろうと想像するのであ 混みいった手続きも、立会人、保証

> らなかったのである。 奉るほどの感激中だったから、折角小 んだかたちになって、しかも常さんは な営みの続けられている最中に飛びこ 屋を訪問することも遠慮しなければな そして四面の楚歌のうちに、密やか

らす親共の諦めであろうか、タカが爪 りを告げる鐘の余韻であろう。 をひっこめた瞬間であり、お説教の終 く限りの小言を並べた挙句、最後にも 「できたことは仕方がない」 これは極道息子を摑まえて、思いつ

辛いことである。 当りだしたと思われたのである。 き渡っていたとは思えない。先覚者は の出現以前のことで、一般の理解が行 ころまでを見極めて、絶唱した老歌人 なにものもなし」と生命ギリギリのと た様子だから、常さんにも暖い光りが この様な寛容の精神の萌がみえてき しかし「老ゆらくの、恋はおそれる

さんにも資格は具わってくる。養老院 ある決断と果敢な行動を賞嘆している なものであろう。辛味の効かない諷刺 のである。 で話題を提供しても問題にはされない 知名度に絞って当てはめてみると、常 の水準線をひく必要はあろう。これを が、よもや、あの人物が、という一つ みが少いのが救いである。そして勇気 強いアッピールであると考えるが如何 で味をつけているが、侮蔑、嘲笑の含 思うに、この絶唱には人類に対する

とに不運であったという外ない。 高地に蔓延していなかったのは、まこ このアッピールが昭和六年時代の上

みも続いたであろう。 依然としてあったのである、反対は皆 無になったのではないから常さんの悩 陽は当りだしたといっても、陰翳は

釣っている時の、まさにあわせようと彼が深刻な表情をみせるのは岩魚を

望価格を明記の上御連絡下さい。

何冊でもけっこうです。

出品希望書籍名、著者名、発行所、

希

ってその無策ぶりをさらけ出すべきで

はない」と論じている。(別添・2略)

出品希望の会員は至急図書委員まで

の感じをうけるのである。

方も一種の神憑りに近いようなものと

暗示にかかっている方も、 と今も尚、感謝の面持ちで語るから、 できたというし、大した験めがあった り方で、一も二もなく痛みがやわらい

かけられた

今はやりの

指圧療法みたようなや

一或はすたってきたか

題のあわせ方にどういう顔付きで応じする瞬間だけである。この人生の大問 ていったかは想像できるのである。

ともいえないのである。 進歩発展をしたであろうか、何かして いる姿も、誰も確認していないから何 んでいるところも、神様を呼びだして いたらしいとは思うが、製作に打ちこ 方、女史の芸術と巫術はいかなる

煙草を止めろとまでかまうのではな つけはあろう、対で晩酌も結構だし、 「かしづかれているとはいえ、女のし

と口は酸っぱくなるばかりだから、 いるのである。手を引け、今のうちだ れと口やかましい人達はやきもきして しよう、しかしだ」一寸ときいてお呉 援団の旗かげは暗くなるのである。 それはそれ、これはこれだ、いいと

くなる。

に遭い、還らず。 豪傑、昭和七年の三月救援に赴き雪崩 一笑いする度に一升を飲むといわれた (註)中山彦一、有明登山口の案内人、

# 山岳図書交換即売会のお知らせ

いて山岳図書交換即売会を行ないま 後三時から七時まで、本会ルームにお 図書委員会は十月二十六日(土)午

応

評を掲げているので何ら御参考までに

方要請があり、また当地紙も同趣旨論

下記の通り報告申上げる。

でもきてもらって「一升買おう、笑い 足元もよろめいてきたと、冗談半分の 飛ばしてくれ」と頼まなければならな だとすれば、有明村の彦さん(註)に は金輪際ないはずである。もしかそう なみの苦労も味ってきたのだろうか。 噂さも流れてきたから、いくらか世間 しかし、悩んで、深刻になる性質で がっくり肩が落ちてきたというし、

#### 日本山岳会々長殿 文化 事業外務省情報

## ヒマラヤ登山について

より現行ヒマラヤ登山禁止措置の緩和 来信写ご参考までに別添送付申し上げ につき報告がありましたので、同大使 マラヤ登山禁止措置に関する新聞記事 最近ネパール国会において一部議員 在ネパール吉良大使より、

るよう要請があったと報じている。 (別添1・略) 宜を供与することにより登山を許可す 山禁止の緩和、および適当な方法で便 Punchayat) における一般討議の席 pal 紙は、二日の当国々会(Rashtrya 七月三日付当地 The Rising Ne. 一部議員より、現行のヒマラヤ登

国外追放すべきであって、政府はすべ 興味でヒマラヤに来る者もあろうが、 land 紙の論評は、二ヵ月前に、 ての登山隊を一律に禁止することによ 国益に有害な活動をする者は、直ちに 定できることである。スポーツ以外の 件ではなく、低レヴェルでも簡単に決 は、政府が頭を悩ませるような重大案 賢明である」と述べるとともに「本件 ずにいるよりは、禁止を継続した方が いないことに関し、「何らの決定もせ 繰返しただけで、何らの結論も出して もビスタ副首相兼外相が同趣旨発言を り、決定は「間もない」と発言し最近 省高官が本件緩和措置を考慮中であ ② また、七月八日付 The Mother-外務

長局

学生の登山隊へプレベス



だまだごく一部の人達のスポーツに限 がその他のスポーツに比較して新聞紙 上に現われないことから察すれば、ま いるようであるが、登山に関する記事 その記事を補足しながら紹介したいと の現況が紹介されているので、ここに 攻撃の夏」と題してソ連山岳会の夏山 その登攀クロニクルは会報二五三号、 の編集した「ソ連邦の七〇〇〇m峯」 スターのア・イ・ボリャーコフ(同氏 定されているように思われる。 ーリャ」(週間新聞)にスポーツ・マ 一五四号に掲載ずみ)によって「高山 それでも、八月五日号の「ニェジェ ジが手渡された。 は、 CCCP≫ (ソ連アルビニスト) のバッ

リブルース(五六六三m、カフカズの最 で一一、〇〇〇人以上の人達が夏期休 タイの一九の労働組合所属の登山基地 暇を過している。 高峯)を図案にした≪AΠbJINHMCT ての登山を行った新人達には双頭のエ 二〇日間の登山訓練を終え、はじめ カフカズ、パミール、天山、アル 連邦でも今が登山の最 盛 期

6

『ソ連山岳界の今年の夏山の現況

田

になって、大衆の中に浸透して行って

ソ連邦における登山もようやく最近

村

俊

介

ソ連の4つの7000m 峯 (3)

---その登攀クロニクル-

A · I · Polyakov 著 田村 俊介訳

Pik Lenina -7134 m-(Lenin 客) Damir, Zaalaiskij 山脈

エキスパートの集った登山

クラ

第一九回選手権大会に参加すべく

ル・天山を狙っている。

登 頂 未登頂者 数者 数 登年代 Route 及 び 登 攀 隊 長 No. 南面から Oktyabr Jskij 氷河、Sauk Dara 氷河を経て、Kpylenko峠 隊長 B. Soustin Lenin 氷河から北斜面を経て隊長、A. Mariyashev
Route は No. と同じ隊長、U. Sapolov 女性二名を含む
Route は No. 30 と同じ隊長、N. Snegirev、S. Artyukhin
Route は No. 30 と同じ(Oktyabrjskij, Edinstvo, Lenin 峯を縦走し北面下降)隊長、V. Nekrasov 1964 30 15 4 31 " 14 32 6 " 33 15 0 " 34 10 0 計 368 174

> -6995 m-KHAN TENGRI

> > 天山, Tengri-Tag 山脈

No.	登攀年代	登預者数	未登頂 者 数	Route 及 び 登 攀 隊 長
1	1931	3	0	南 Inyljchek 氷河から南西斜面を経て 隊長, M. Pogrebeckij (初登頂)
2	1936	3	0	Route は No.1 と同じ。隊長, E.Kolokljnikov
3	"	5	0	Route は No.1 と同じ。隊長, E.Abalakov
4	1954	5	0	Route は No.1 と同じ。隊長, V. Shipilov
5	1962	4	5	Route は No. 1 と同じ。隊長,A. Mapjyashev
6	1964	6	0	南 Inyljchek 氷河から南 Mpamornyj 稜より 隊長, B. Romanov
7	"	14	0	Route は No. 1 と同じ。隊長V. Vorodishchev
8	"	5	8	北 Inyljchek 氷河から。隊長,K. Kuzjmin
計		45	13	

①会報 No. 254 に続く Lenin 峯の 1964 年度の登攀記録 (訳注) ②高度 7000 m に殆んど近い Khan Tengri の初登頂から 1964 年までの登攀クロニクル ③出典は(ソ連アルビンズム年鑑「征服された峯々」)より

リエーション・ルート及び それもこの地域の未踏のバ ムニズム峯登攀等が目標に ーを経る新ルートからのコ からパミールコエ・プラト 走、フォンタンベック氷河 タン峯 (六五六六m)の縦 七二六m)ーエンゲルス峯 四〇m)、マルクス峯(六 からイズベスチャ峯(六八 コムニズム峯(七四九五m) 縦走である。その中でも、 (六五一〇m) ― タジキス

される。 スカイ・ダイバーの高度な技術が要求 グには、緻密な計算と、パイロットと 待ち受けている。この危険なダイビン 点は飛行場のような平坦なところでは グを行なうことにある。勿論、着地地 の七〇〇〇mの高度にスカイダイビン ト達がレーニン峯、コムニズム峯地域 様、 13の四時間をこのアプロー 機関であったこれまでには、 れる。馬、ラクダ、ヤク、ロバが輸送 コプターを利用していることは特筆さ プローチには、遠征隊の殆んどがヘリ なく、氷や雪、岩壁や底無しの深淵が しかし最も興味深いのは、 パミールのジャイアンツの麓へのア ▲ブレベストニク♥のアルビニス 昨年と同 チの 遠征の

既に四人のアルビニストがこのバッジ く七〇〇〇m峯に登っているレコード ン」ー一九一七年生れ、十回成層圏近 ゲーニ・イワノフ」一モスクワっ子、 を胸にする権利をもっている。「エヴ ッジは最終的に決定されていないが、 大戦の パルチザン。「キリル・クジミ 功労スポーツ・マスター、第二次世界 ーヴァレンチン 功労トレーナ、 ボジュコフ」 水力発電所技

パベーダ峯七四三九m、コルジェネフ ズム連盟は非公開懸賞募集をした。バ た。バッジの図案作成にソ連アルビニ アルビニストの名誉章を作ることにし スカヤ峯七一〇五m)の登頂を行った (コムニズ峯、レーニン峯七一三四m) 会はソ連邦の四つの全七〇〇〇m峯 ソ連スポーツ協会団体連合会」委員 峯には一二三名登頂しているのに、パ で最北に位置するパベーダ峯である。 ある。それは世界の七○○○m峯の中 モスクワのエンジニヤー。ヘコンスタ 雪崩である。 さなかった。不成功の原因は悪天候と 山隊の内二隊だけがアクシデントを起 ベーダにはたった二九名しか登頂して レーニン峯には八一四名、コムニズム い。しかし難しすぎる程、難しい山が チ、名誉スポーツ・マスター。 レニングラードの 山岳スキー・コー ンチン・クレチコ>一一九三三年生れ、 いない。このピークに向った一〇の登 七〇〇〇m峯で困難でない登攀はな



### ジョン・ティンダル のこと②

八十島信之助

五九年の暮にはまた冬期の観測のため テ・ローザにも登っている。次の一八 どを研究した。この時にはさらにモン 測をしたし、一八五八年にはグリンデ の中腹の氷河メール・ド・グラスの観 ルヴァルトに入って、アレッチ氷河な に、ふたたびメール・ド・グラスに入 ニーに入り、モン・プランに登り、そ 続いて一八五七年には七月にシャモ

が岩波文庫になって紹介された。 日本では一九三二年、矢島祐利の翻訳 第二部主に科学的」と題して出版され、 第一部主に談話的」「アルプスの氷河 これらの山行きは「アルプスの氷河

一九三二年、これは筆者の大学予科

る。星一つは今日は五十円になってい きめられる、星の数で定価がついてい ることは少なかった時期である。 医学生の生活にはまだまだ影響を与え これと戦わされていた。しかし都会の リラ、当時は匪賊と呼ばれていたが、 夏は泥濘の中で、日本軍に対抗するゲ ら徴集された青年たちは、冬は厳寒、 ができていて、多くの主として農村か った戦争から、既に満洲国というもの 二年の年である。前の年に満洲で始ま 岩波文庫は今でもページ数によって

> 館のひとつ、日比谷映画劇場の入場料 イデルも五十銭だったのだが、星一つ ヤホール、ニュー東京の生ビールのザ が五十銭、やはり数寄屋橋にできたビ ある丸の内にできたばかりの洋画封切 方とも星二つの四十銭だった。今でも たのだろうか。 アルプスの氷河第一部と第二部は、両 二十銭は高かったのだろうか、安かっ

始めたときと同じの二十銭であった。

の干渉を見るのであった。 のように煙をはき、霧が出はじめると 風下に凝結ができるのが見える。火山 頂上を眺めると、湿気をおびた風がこ くる中で、沸点測定が始まる。リッフ 者の目はいつもそこに凝結と結晶と光 長いすじになって立ちのぼる。物理学 の冷い峰にふれ、水蒸気が冷却されて 気の中から蒼ざめた淡い日光がさして 到達したときにも、きらきらする水蒸 より百数十メートルだけ低い最高点に さいと感じる読者も多かったに違いな 学を志す私たちを捉えないではいなか ェルベルクの夕方、マッテルホルンの い。モンテ・ローザの、モン・ブラン 必ず科学者の説明がつく。それがうる った。波のえがく自然の美しさには、 学者の目で眺めているところから、医 の著書は、山と自然と、雪と氷河を科 り出したころである。ティンダルのこ 東京の学生なかまにもスキーがはや

も知れないが、私にはそうでなかった。 は一般の読者からはうるさがられたか で、窓からの日射しが次第に強くなり、 る。バリからバーゼルへの列車の中 んで、車室が暑くなる、といった描写 座席が日光のエネルギーを一杯すいこ また翌年続刊されたアルプス紀行があ い。そののちの旅行については一九三 三年に邦訳の出たアルプスの旅より、 ティンダルのアルプスに関する著作 氷河の一部・二部では止まらな 学校を出るとすぐ軍服

には違いあるまい。 は大げさだろうが、小さい幸福をます とができれば、人生の最大のといって れるもの一つ一つに美しさを見出すこ 自然の中にとびこんでいって、目にふ 面にできるスキャブラ、海老のしっぽ、 に、ティンダルを思い出した。雪の表 ルトの歌曲ドッペルゾンネよりさき 陽が見えるではないか。私はシューベ にさらに一つずつ、あわせて三箇の太 にある低い雲の層の中に、太陽の左右 かす地平線に日の没する時、そこだけ えるのであった。秋の日暮れ、見はる て、それがティンダル現象で輝いて見 中の水蒸気はすべて結晶になってい しの中に黄金に輝く無数の氷晶、 零下三〇度の晴れた朝、横からの日ざ

ない。 ルの数冊の著書によることは否定でき が、その大きい一部が、このティンダ 人とによって開かれてきたのである のいろいろの体験と勉強と、先生と友 である。私のその目は、自分の今まで うは思わない。ただ見すごしてしまう はつかまえずにはおかないだろうから 自然の小さい美しさをも、科学者の目 人もあるかも知れない。しかし私はそ の目は不要であり、かつ邪魔だという 自然の美しさを感じるのに、科学者

年の自然への美しさへの目を開かすの 七十三歳であった。 ィンダルは一八九三年になくなった。 に大きい影響を与えたこのジョン・テ スの氷河を研究し、そして東洋の一青 じ、多数の科学啓蒙書を書き、アルブ 単なる物理学者でない、文筆に長

の慫慂によって転載したものであ の機関紙「えみし」第四号に寄稿 医科大学のワンダーフォーゲル部 ……(これは筆者の勤務する札幌 したものに加筆、伊藤秀五郎教授

にきかえた。任地の北満の最初の冬、 を双胴船で渡り、奥入瀬から蔦温泉を (ニページより)

護や緑化に努めるとのこと、薬王院の くなり、今は小さなお堂の中に鎮坐ま りとした木立ちの下かげに立っていた 住職が動植物の保護に力を入れている 山が荒らされておらず、今後も自然保 下るあわただしい一日だったが。存外 横目に見て静岡県で袂を分った。月末 弥次喜多の曾遊を再現し、安倍川餅は 子まで延ばして丁字屋のとろろめしに 流れになった代りに、帰りのバスを丸 安倍峠越えを楽しみにしたのが雨でお い一夜を過ごした。翌日ははじめての 世話でもみじ会の諸君と梅ケ島に楽し します。十一月中旬には静岡支部の御 河童地蔵が火野葦平の筆によって名高 年目に再遊して見ると、むかしこんも の麓で少年の日を過ごした私には最初 丘はこの年登った最低のものだが、そ 山に運び上げた。海抜一二〇mのこの 訪問したときバスは一行を若松の高搭 旅に出た。往きはアメリカ大陸を横断 末にはまたジュネーブまで往復十日の の注意を与えたのち青森に出た。十月 けるケーブル工事場を見て自然保護上 ことを知っていささか安心した。 で往復しケープルで上って大ダルミに 公園にきまった高尾山に出かけた。車 には明治百年記念明治の森として国定 に登った山としてなつかしく、五十五 に合った。閉会後みんなと北九州市を て福岡に飛び国連協会の全国大会に間 し、帰りは北まわり、マッキンレーに 経て酸ケ湯で一休みし、多茂范岳にか 一礼してアンカレージで一休みした。 羽田につくとすぐ飛行機をのりかえ

大山の会の忘年会に出て山の話しに興 れず、僅かに月末になって山岳会や東 凡、おまけに十二月は一歩も都をはな びまわったが、山行としては極めて平 じただけで終った。 このように昨年中はずい分忙しく飛

# キング・ピーク調査

の手前の岩峰ならびに岩稜の完登ルー ルートの三分の一の Snow Junction まで行くことはできませんでしたが全 での中間点)Ice pyramid (4500 m) 名)に Landing して予定の(頂上ま までの二週間 Princess Glacier (仮 調査を、今年六月四日より六月十八日 ルート(仮名=ダイレクトルート) ました、カナダキングピーク南面未登 工作を終え無事帰国致しました。 一昨年より当恋嶺山岳会で計画致し 0

の確信を得ました。 が登攀や現地にスムーズに入れること を果し、本遠征隊(昭和四十五年春) 使用)、また気象、現地 Whitehorse City の状態などについて完全に目的 ケースとして(我々二名は違う装備を 調査と装備、食料に関しては、テスト 常に神経を使いましたが、登攀ルート 今回は二名の調査隊派遣のため、 非

近いため、十五日間の半分は雪でし ては、カナダのシーズンでも春から夏 することができませんでした。 が出ていなかったため、何もお手伝い きましたが、何も Ground-Air Code していた大阪府岳連の Party の遭難 にあります Mt. Vancouver に入山 た。我々と同じセントエライアス山塊 ルートであると思います。気象につい テーにとんだ技術的に困難な興味ある 稜、青氷とヒマラヤ的な、またバラエ れませんが、急斜面、ナイフリッジ岩 比べるとスケールは少々小さいかもし 々は十八日に彼らのBCの上を飛んで も東京に帰って知ったわけですが、我 へと変りめの頃のため、また太平洋に 二二一メートルですから、ヒマラヤに 、緊急時のセスナと地上とのサイン) BCが二八〇〇メートルで頂上が五



会員佐藤久一朗氏筆

### 槇有恒氏より

ご寄贈いただきました。 になりました南極観測隊の報告書類を 昭和32年に南極特別委員会より発行

#### 記

図書室では、会報の図書紹介欄で紹

寄贈依頼図書の受入

糧品明細書 『南極地域予備観測隊が携行した食 『南極地域観測隊報告(観測部門)』 『南極地域観測隊報告(設営部門)』

『南極地域観測隊通信』No.6~8 『衣料関係』

『機械関係報告書』 『通信関係』

『木下是雄教授の行動日誌』

(1)高木菊三郎著『日本に於ける地図測

量の発達に関する研究』昭41・1

くお礼申し上げます。

故高木菊三郎氏寄贈

けに、ご協力下さいました方々には深 た。なかなか入手し難い貴重な資料だ 度左記の資料がそれぞれ寄贈されまし 力集めることにしておりますが、この ない図書、及び海外遠征報告書等を極 介された図書であっても備えられてい

(注) 本会ではこれら資料を『南極地 域観測隊報告書一九五七』とし て、合本して保存することにした。

## 購入図書のおしらせ

(1)槇有恒著『ピッケルの思い出』

昭39

牧書店刊

中川勝次氏寄贈

(1)新村出編『広辞苑』昭43・3 入致しました。どうぞご活用下さい。 日・英・独・仏の四ケ国語の辞典を購 この度図書室では、閲覧者のために

(1長野県山岳連盟ヒマラヤ遠征隊『ギ

長野岳連ヒマラヤ遠征隊寄贈

②旺文社編刊『エッセンシャル英和辞 典』昭42・10

(1)電電九州山岳会編著『ヒムルン・ヒ

茂村進二氏寄贈 ヒマラヤ後援会刊 ャチュン・カン』昭40・3

(4鈴木信太郎他編『スタンダード仏和 (3)相良守峯編『独和辞典』昭43·1 辞典』昭43・3 大修館刊

(1)京都岳士山岳会『AACK

No. (1962.2)~No.5 (1966.6)

京都岳士山岳会寄贈

マール報告書』昭39・5

#### 洋書の寄贈 34 5

#### 原寛氏寄贈

号に掲載いたしましたが、それらの蔵

「磯野記念文庫」の目録を会報25・276

磯野記念文庫について

of Tokyo, 1966 Eastern Himalaya, Hiroshi Hara: The Flora University of

初見一雄氏寄贈

尚『山岳』の未製本のものは現在製本 りましたので、追加報告いたします。 書とは別送で『山日記』一九三一年版 ・及び一九三三年版の二冊の寄贈があ

Ernest Shackleton: South-The

### 早川書房寄贈

(1)ピーター・ギルマン、ドウーガル 直登』昭42・12 ハストン著・加島祥造訳『アイガー

## 実業之日本社寄贈

(3)河合茂美・矢田健次郎著『歴史の町 ②柏原破魔子著『ローカルの旅情を探 る』昭43・5 (ブルーガイド17)昭43年版

### あかね書房寄贈

(1)フレデリック・M・ベイリイ著・諏 謎の河』(ヒマラヤ名著全集)昭43・訪多栄蔵・松月久左訳『ヒマラヤの

4第I次RCC編『岩登りとグレー (3)高田光政著『北壁の青春』昭43・6 ド』(現代アルピニズム講座3) マラヤ名著全集5)昭43・7 昭

#### シュ紀行ー (5)山本健一郎編『ロシュ・ゴル氷河の ――一橋大・東部ヒンズー・ク - 昭43・7

主婦と生活社寄贈 (1)北杜夫著『白きたおやかな峰』昭43

for Alpine

Expedition, Longmans, Story of Shackleton's 1914-1917

Green

# Swiss Foundation

S.F.A.R.: The Mountain World Research 寄贈 1966/67

横山隆吉氏寄贈

D. Mordecai: The Himalayas, (1)串田孫一編『山の博物誌』(エー ルワイス・シリーズ4)昭43・7

# 新刊図書の寄贈(43・5~7

(1)日本山岳会編著『アルプス 縦走』

# 抒情の旅』昭43・5

(2)ヘルベルト・V・ティッヒー著・福 田宏年訳『無名峰の聳える国』(ヒ

昭12・2 河出書房刊

(1)主婦と生活社編『信州と飛驒』 (2)主婦と生活社編『伊豆と箱根』 (3)主婦と生活社編『富士・東海と志 ラー旅第6巻) 昭43・4 摩』(カラー旅第7巻)昭43・5 ラー旅第5巻)昭43・3 (h つカ

### 文芸春秋社寄贈

角川書店寄贈 (1)小泉信三著『小泉信三全集22巻』昭 43 6

# ルワイス・シリーズ5)昭43・6

②川崎隆章編『思い出の山』(エーデ

日本文芸社寄贈 (1)東京大学インド植物調査隊編 井上書店寄贈 ヒマラヤの植物写真集』昭43・4

# (1)大島亮吉著『先 蹤 者』(日本岳人全

(2)小島鳥水著『山の風流使者』(日本 岳人全集)昭43・7 集) 昭43・6

### 安川茂雄氏寄贈

(1)安川茂雄著『歴史の山みち』昭43 5 実業之日本社刊

## 山田圭一氏寄贈

(1)山田圭一写真『空から見た北アルプ 山岳巡礼俱楽部寄贈 ス』昭43・6 山と溪谷社刊

(1)山岳巡礼俱楽部編刊『折れたビッ

ル』昭43・3

## 既刊図書の寄贈

## 林清氏寄贈

(1)フリッツ・ベヒトールト著・小池新 大塚基弘氏寄贈 巻』(山岳文庫)昭14・12 朋文堂刊(1)字野光一編『ヒマラヤの山々 上 二訳『ヒマラヤに挑戦してー ガ・パルバット一九三四年登攀

(1)吉田十一著『日本旅行史』昭2·12 山崎安治氏寄贈

#### 野上成勇氏寄贈 日本交通学会刊

(1)専門図書館協議会編刊 責館総覧』昭31·11 『調査機関図

# バック・ナンバー欠号の寄贈

横浜山岳会寄贈 (会報)

333, 335, 337~354, 356 256~258, 264, 283, 286 212~222, 225~226, ~182, 185~193, 199, No. 172, 177~178, 180 ~383, 385~425, 427~ 311, 317~319, 321~ 288~300, 302~308, 250, 252, 254, 254, 254, 228~229, 237, 241~

### 松田雄一氏寄贈

『山と溪谷』No.11~12,33,38,46, 73, 75, 83 52, 55~57, 59, 63~64,

## 定期刊行物受入報告 (43・5~7) 〔部報・会報類〕

(5)神戸大学山岳部『山と人』No. 9 (3)鹿児島大学山岳部『部報』No. 6,7 ②中央大学山岳部『年報 第六号』 (4)上智大学山岳部『Morgenrot IX』 (1)国学院大学山岳部『足引 『S·A·V報告 一九六一』 1965~1866

(8)全国高体連登山部『部報』No. 11, (7愛知県学生山岳連盟『やまのこえ (6)早稲田大学山岳部『時報 第22号 第二号 一九六八』 昭和41年4月~42年4月合宿記録

9日本民族学会『民族学研究-畑沖電気芝浦山岳部 『らんたん‐ —」第32巻第4号 特集

_			=1=0		The same				
NO. 10	No. 431~433	No. 11(1968. 7) No. 3 (1968. 6)	No. 121~123 No.10(1967.12)	No. 138~141	No. 74~75 No. 12~14		No. 516~519		福 領集2
(2) 「雪と岩」	横浜山	21 『RCC速報』	(20 II II Lと雪)		17 (16)『兵庫山岳』	(15) (1 ) [山嶺]	4 (13) 『京都山岳』	『OMCレポ	山能代山の会『白神猫

(5) (4) (3) (2) 『岳人』 (5) 島田巽氏寄贈 その他 『三田評論』 No. 671

②福岡大学山岳部『一九六七年度剣岳 (1)新潟県山岳協会『新潟県夏山コーチ 冬山合宿遭難報告書』『剣岳テント 九六八 -登山者の心構えと遭難防止

# Journals Arrived in May-

Die Alpen : Jahrgang (April)~6 (Juni) 1968 44, 44, 4 2

.

- 2 ω Alpinismus: Jargang 6, Quartal Die Alpen : Jahrgang
- 3, Marz~6, Juni 1968
- Der Bergsteiger : Jahrgang No. 1, January, 4, April~6, Appalachia Bulletin: Vol. 34,
- Heft 3, Marz~5,

No.

284,

1952

5

6 66, Février~67, Avril 1968 Montagne: Année 94, No.

藤祐司君・石田学君遭難追悼号―』

No. 3, Diciembre 1967-Enero Champaqui (Der Grup Escuele de Andinismo Juventus):

2

- La Montana: No.9, Diciembre September~6, November,1967 Alpenvereins: Jahrgang 19, 5, Mitteilungen des Deutschen Jahrgang 20, 2, Marz 1968
- 2, Autumn 1967 Mountaineering: Vol, V, No
- C.M.C. The Newsletter: Vol Österreichisch Alpenzeitung: 22, No. 2, March-April 1968 1357,

(1)『アルブ』

11.

Jänner/Februar ∼ 1358, Marz/ Jahrgang 86, Folge

No. No. No.

152~154

358~359

13.

249~252

123~125

12

Rivista Mensile: Anno 89, No 2, Febbraio~3, Marzo 1968

Sierra Club Bulletin: Vol.

Bulletin (U.I.A.A.): No. 29, Fevrier~30, Mai 1968 53, No. 4, April~5, May 1968

15. 14.

- The Geographical Journal: The Geographical Magazine: Vol. XI, No. 9, January 1968
- Mazama: Vol. Vol. 134, Part 1, March 1968 December 1967 49, No. 13,

18 17. 16.

19. Verkehrsbuch (Verband Al-37, Sommer ausgabe 1968 piner Vereine Österreichs):

### 外国ジャーナル・バックナンバー 欠号の寄贈

The Alpine Journal: Vol.LVIII,

とにしてあります。……中略……

本年のヒンズークシュは雪が多く、

じめて接しその威容に感激しました。 Peak X を発見し、6000mの山容には

登路は一応、 Pagar 谷よりというこ

Alpine Club 寄贈 No. 283, 1951

> 山口氏) 寄贈 婦人部N·Z隊 (秋田・岡部 ·武田育

The New Zealand Journal: Vol. XV, No. 41,1954 Alpine

: Vol. XVI. No.42,1959

: Vol. XVI, No.43,1956

#### 通 信

アフガンより

さて、皆様の絶大なご援助、ご激励

こうしょうこう きょうしゃしょう こうこうしょ

さ

出発まで大変お世話になり有難く感 夫

謝いたしております。おかげさまで私 名が土地名・ノゴルゲイ谷に入って、 日峯をおとしてきました。去る29日、 名のデョルギョ谷の最奥部にある5050 員)、犬飼進、川合延夫の3名が土地 した。しかしそのお蔭で、佐久間修(会 支谷に入ってしまい4日間を空費しま の状態を探るべく踏査活動を始めまし Peak X へ上っている谷をつめ、同峯 らで、予定が一日おくれ、アンジュマ の賃上げ要求やら馬が一頭足を折るや アンジュマンパスを越しましたが人夫 ごさせていただいております。 征隊も隊長はじめ、隊員一同元気にす たち大垣ヒンズークシュ・ヒマラヤ遠 高木(泰)、林正陽(会員)、瀬川の3 たが、地図上の記名に誤りがある別の 五万分の一地図をもとにPagar谷から ック・インスティチュードで得ました ン村への到着は26日になりました。 27日からカブールのカートグラフィ 6月20日カブールを出発し、24日、

この峯だけはと隊員一同はりきってお の多いのが、私たちにとって有利か不 ります。 利かは今後の問題ですが、何としても

んが、すぐ上部にあるナモズ谷、ワル マノ谷などに興味があります。 登頂後はどうするか決めておりませ

アフガン・ボケで乱文乱筆になった

と思います。御容赦下さい。(吉沢宛) and the second of the second of the second

ような調査の資料と成果を携えて帰る ます。その節は、皆様にご報告できる 専念し、11月中旬帰国の予定でござい びタンザニア国各地の現地調査研究に 溢れるお力添えに対して厚くお礼を由 べく期しております。 にそうべく、約四ヵ月間ケニア国およ し上げます。団員一同は皆様のご期待 する運びとなりました。ここにご厚情 いよいよ7月18日アフリカ大陸に出発 アフリカ大地溝帯学術調査団一行は、 のお蔭をもちまして、私共名古屋大学

昭和43年6月30日

大地溝帯学術調查団 名古屋大学アフリカ 入

名古屋大学アフリカ 調查研究会 憲

会長 松 沢 勲

### 七月 理事・評議員会

からアフガン晴れが始まりました。雪 また天候も不安定ですが、昨日あたり 日時 場所 7月18日 午後18時30分 本会々議室

> 〔理事〕 藤井、山崎、 野、川森、竹田、 倉、野上、大貫 吉沢、深田両副会長 宮下、 大塚、 長尾、 丹部、 小飯

〔評議員〕 渡辺、加藤、石原、 [委任出席] 三田会長 [理事] 広谷 佐藤(久)伊藤(秀)堀田監事 芳野、小方、中島、浜野〔評議員〕 中田、高山。牧野監事 沼倉、

約二千万円。 あり)収容人員四〇~五〇人。建築費 は、建坪約百坪(二階建、三階屋根裏 の構想が述べられた。そのスケー (一) 神河内山荘の件 先きに行なわれた、山荘運営委員会 ル

ねばならぬものであるが、こじんまり あり方も慎重に考慮を払い、新改築せ 地の公園化を考えると、本会の山荘の することが肝要である。 舎的なセンスから一歩先んじたものに 作る必要があり、外観も、在来の山小 した、快適な、いいクラブヒュッテを 現在の上高地、ならびに将来の上高

である。 ということで、営林署に申請する方針 坪)関係から、約三○○メートル奥ま ったところに五○○坪くらい新規借用 狭い(○、○五四へクタール、一六二 現在のところは道路に近かすぎ、かつ また借地の広さ、場所についても、

り、これを推進すると同時に、併行し ことにする。 で、更新と同時に新規申請を行う。 在の借地の期限は九月三十日であるの て関係省庁への書類の申請を行う。現 若し不許可の場合は、現在地で行う 建築資金の調達は、賛助会員に当

け加えられた。 限り心配がない旨現地調査の報告がつ があるが、その後護岸工事も完了して いるので、現状では余程の災害のない かつて善六沢の水害に見舞れた経験

問題ないが、新規借地となると、厚生 の初めからである。 も知れない、奥まったところは、荒地 省など他の省との関係が生じ、困難か ると、現在地での借地の増加・新築は 林署の見解が述べられたが、それによ っているか不明であるので分らない。 であるので、立木がなく、営林署とし いずれにしても新規となれば、来年度 ては異論がなかろうが、原図でどうな これについて主な討議は次の通り。 高山評議員、新規借地について、営

の基本的な線がはっきりしない以上、 与をせねばならぬのは常識である。と 困難なことは衆知の通りである。こと してほしいと要望があった。 交渉も出来ないので、この点を明確に 会員から援助を仰がねばならず、その で新築するとなれば、外部からの賛助 建前であるが、現状では自力で新築は ためには、条件として、多くの便宜供 本会所有の山荘という

を進め、以降種々条件や、情況の変化 定のアウトラインの説明があり、種々 の決定を行う。ということを確認し によってその都度理事会にはかり最後 討議の結果、一応、その基本線で話し 大塚理事 これについての新使用規

も不十分であったが、以降この点につ 支部長などのこれについての意見など は、経理面の詳細なデーターや、長老、 は、加藤、大塚が当ることになった。 務、庶務が窓口となり、資金の調達 は承認され、省庁への書類申請は、総 いて再度常務理事会において検討した (二)ルーム移転の件 六月の理事評議員会までの時点で 以上の通り、山荘運営委員会の構想 藤井理事

づいて飯野理事から詳細述べられ、そ 結果が述べられた。 まず財政面からの見解が資料にもと

> る。 ションの買取りは財政的に 無理であ て青葉台のG8、一千三百万円のマン 物の総額は一千万円までである。従っ 費などを集め、健全財政を計ったとし ても、借入金は三百万円が限度で、買 らすると、将来会費の値上げ、 、賛助会

意見も紹介された。 また長老方の時期尚早であるという

ちに手をつけた方がよいと思う、と意 財務ポリシイ、将来の運営という点か 条件のところが出て来るであろう、と で会のオリジナルメンバーが健在のう ら見ると、安定の基礎を早く作るべき 尚早であることは分るにしても、会の たいない話しであるし、感覚的に時期 賃等に関する出費は、何としてももっ いう業界消息通の意見が述べられた。 加藤評議員からは、毎年百万近い家 また中田評議員は、将来もっとよい

見が述べられた。 る問題は向井組と折衝して進めること ための施策を実施する。また六階に移 にした。 して見送ることとし、会の健全財政の 以上討議の結果、移転は時期尚早と

十月に図書交換会を行う。

で、一枚一二〇円位で作れる。 診したところ、ネガは沢山あるので、 とにした。 してあげたらどうか。山と溪谷社に打 して、外国からのお客さんにお土産と ノーギャラで協力すると言っているの (三)提案議題 この件については総務で検討するこ 日本の山のスライドを数枚一組用意

(四)報告事項 ②林家から十万円寄付の件、 状発行承認の件 ①立教大学山岳部韓国登山隊に推薦 深田副

> ③宮崎日印婦人合同登山隊長の帰国 深田副会長を通じて寄付があった。 マラヤ登山や関係書籍などの研究費 に使ってほしいという申出があり、

た。後任が見っかるまで勤務しても 思わしくないので、辞意が表明され ④図書の大越さんから治療の経過が らうことにした。

員から、渡辺、加藤評議員、藤井、大 難事故の山形地検の取調べ参考人と ⑤山形市立商業山岳部、大朝日岳遭 塚常務理事が事情聴取に協力した。 して、辰沼評議員につづき、本会会

①会員名簿は原稿が一応出来たので 問し、打合せを行う。 8図書委員会 発行を急いでいる。 と連絡すみ。 キンボール氏は九月五日本会を訪

この件は承認された。 四〇〇円。 付録として地図がある。会費は年 院)に入会したい。会報は年四回、 日本国際地図学会(本部国土地理

⑩第二四四回小集会、チェコ映画 9婦人懇談会 会を行った。九名参加。 「タトラの夕べ」二十名出席。 六月末 伊東川森理事別荘で懇親 以上

### 昭和43年度

各支部総会報告 (1)

本人の意志を生かすためにと会のヒ 谷両君(非会員)のうち林家から、 六月谷川岳で遭難死亡した林、

> ▽場所 ▽**日時** 昭和43年7月7日10 山梨支部

(2)一般事業報告について (1)総会延期承認について (3)決算報告について ▽収入の部

▽支出の部 雑収入 事業収入 会費還元金 .....

加盟費 雜費 事業費 ……六、六五〇円 ...1011、四10日

調査のため九月末日、北海道―九州

シエラクラブのキンボール氏は下

の各地を視察。これについて各支部

(5)事業計画について (4)規定改正について 5 18 19 ▽準支部員の支部費を昭和44年度よ り五〇〇円とすることを決定。 金山平懇親会

25 28 準支部員基礎訓練 縦走山行 南ア北部、 野辺山わらび狩り 中央ア

9月 3 2 1 12 10 10 月月月月月月月 9月 北岳山行、スキー 奥秩父山行 木暮祭参加 北ア槍、穂高山行 県体育祭の登山参加 年次晩さん会

6子算について ホーオー三山山行

甲府市山梨蚕糸会館ホー 時より

支部費 前期繰越金 ……一一、六二八円 .....OH 1100E EOOE 0000

組織費 000E 五八〇円

尾根山行

毎月第二水曜夜、例会を行う。 スキー合宿

> 常務委員 斎藤俊哉、 委員 北村武彦、 通、西室泰照 而、神山辰雄、 山本良子(婦人) 計)、山村正光、田村英也(庶務)、 惠(企画)、石塚正明、日本伸(会 望月雅郎 小林松男、 岩間弘雄、 今沢寛、柳沢 成沢正 古屋学

監事 評議員 芦沢俊雄、 屋五郎、百瀬舜太郎、野口二郎 今井友之助、大沢伊三郎、 小田和友蔵、 松尾寿 岩間升、 水口弥

### 設立認可さる 社団法人日本山岳協会

りました。 号をもって設立を許可されることにな 申請書が受理され、昭和四十三年五月 二十五日付、文部大臣より委体第二〇 日付をもって申請の社団法人設立許可 ましたが、この度ようやく本年一月五 総会を開催して以来、一ヵ年を経過し 昨年五月二十四日に、社団法人設立

山界の組織体の代表として、本会は、 代表することになりました。 きない面で協力していくべきものと考 本会の特質を活かして、日山協ではで ことになりますが、日山協は日本の登 で日本の登山界の発展に寄与していく 本化は推進されてまいりましたが、法 本山岳連盟の協力により、日山協の一 ここに名実共に日本の登山界の組織を 八格をもつことにより日本山岳協会は 今後は、本会と日山協は夫々の立場 松方構想にもとずいて、本会と全日

を祈念して止みません。 いずれにしても日本山岳協会の発展

		279-1968-
俳 句 水田晴山 葛さくや人ゆきし径朝日さす 森れそめて山径せわし小母と子と な倉は人家かしき祭かな	大大学 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞 賞	## 1
		ルーム日誌(43・7) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		「タート では、 の で で で で で で で で で で で で で で で で で で

省/第四章・日誌

主な内容―序文・大河内一男/第一章・紀行/第二章・調査/第三章・計画と反

■B5変形判/本文二二〇頁/写真六〇頁/上製箱入 **定価三〇〇〇円** 

東大隊の報告書。ほかに学術調査記事も収載。

東京大学カラコルム遠征隊編/ヒマラヤの俊峰

ヤン

יי

ュ

九六五

にいどんだ



## 茗溪堂 Ш

東京都千代田区神田駿河台二─一電話二九一—九四四二■振替口座東京二四七二三

#### 遠い山 近い山

望月達夫著 ひっそりとした山や峠の紀行集。 のような気易さで山仲間に語りかける 山に登り続けている著者が、炉辺閑話 九六〇円

赤星 昌編 あり、観光や登山案内書に最適。 俗のすべて。付録に三色刷詳細地図が 九州の最高峰をもつ屋久島の自然と民 定価 三八〇円

#### 山岳61年 62 年

日本山岳会編 定価 6一、八〇〇円 係の記事がいっぱいの山岳年鑑。 の報告のほか、高い水準を示す山岳関 日本山岳会の機関誌で、毎年海外遠征 62二°000円

# 登頂ゴジュンバ・カン

アンナプルナ日記

一九五三年に京都大学の小人数による

頂に立つまでの異色の登頂記。 の男たちが、未踏峰ゴジュンバ・カンの 明治大学ヒマラヤ登山隊の記録。八人

## 九〇〇円

日本山岳会編 新情報や役に立つ記事がいっぱいの山 行き必携の書。職場、学校にもどうぞ。 三八年の歴史ある編集。全国山岳の最 山日記一 九六八年版 四〇〇田 剧版。 南極新聞

## 南極研究会編

できた南極新聞社発行の日刊新聞の縮 第一次南極観測隊の記録。昭和基地に

## 六〇〇円

うお願いします。それは山崎社長の負 すから、せめて正確に書いて下さるよ の九割までを書き直さなければならな です。その理由は、送られてくる原稿 うわけで、山崎社長自から陣頭に立つ それぞれ出張します。会社でいえば、 す。残暑きびしい折です。皆さんの山 担を幾らかでも軽くすることになりま いからです。活字になって残るもので けではありませんが、割付も仲々大変 ことになりました。愚痴をならべるわ 行に幸あるよう祈ります。 吉沢会長、小方割付工場長が不在とい

昭和四十三年九月十日発行

担当理事

全

# 山で唄う歌第一集/第二集

来日、明年三月まで在日の予定で、 舎をさがしています。三人は九月下旬 外務省からの要請で、ネパール留学生 文化協会では、ネパール大使館と日本

日ネ協会からの連絡

日本ネパール

160

三名の世話をすることになり、その宿

戸野昭・朝倉宏編 定価一集・二四〇円 原語の曲には訳詞をつけ68曲を集録。 第二集は日本の歌も選んでむずかしい 第一集は比較的ポピュラーなもの61 二集・二八〇円

#### 森林・ 草原・ 氷河

行。ほかに格調高いエッセイを収載。 加藤泰安著 づる三十余年にわたる探検と登山の紀 近代登山家の第一人者である著者のつ 定価 一、五〇〇円

# 三十年間、異色画家が好きな山を登る

は東京都目黒区大岡山東京工大川喜多

研究室気付日ネ協会へ御連絡下さい。 四歳。ヒンズー教徒。お心あたりの方 ルキの三人、いずれも二十三歳と二十 留学生はシャルマ、ラジバンドリ、

七二六一一一一

編 集 後 記 雪原の足あと

坂本直行画文集 かたわら、北海道の四季と自然を楽し い文章と豊富な絵でつづった画文集 定価 二、八〇〇円

#### 貴重なヒマラヤ遠征記録。京都大学初 京都大学学士山岳会 のヒマラヤ報告。

沢さんがロンドンへ。私はブータンへ ▼編集委員会も松田さんが七月に出張 したのを皮切りに、九月中旬から、吉

## Щ

編集委員の顔振

編集代表

員

小倉松坂吉山

方知田本沢崎

雄矩 一安

弘敬一祥郎治

昭和四十三年度

早大山岳部々報ご希望の方にお分けし

な

夜二食。風呂、便所は洋式の必要 半以上、食事は家庭と同じもので朝

で、部屋は日本間、洋間をとわず四畳 ・親身になって面倒をみてくれる家庭 入側の条件は次のとおりです。

る人がいなくてもよい。下宿代月一万

言葉は日本語上達のため英語の出来

能な範囲。期間は最低明年三月まで。 五千円前後。場所は東京近辺、通学可

昭和17年一昭和40年

A 5 判本文474頁年報170頁写真40頁ケー

頒価: 2,000円

早稲田大学山岳部 東京都新宿区戸塚町1 647 振替口座 東京 9 4 8 1 6

郵便番号

※直接部宛お申し込み下さい。

東京都港区赤坂一丁目三番六号 株式会社 報

振替口座東京四八二九番 (293) 七四四

印

頒価五十円

発行所 法员

編集代表

Щ

安

岳

治会

====

向井ビル 日本山

東京都千代田区神田錦

- 433